「美術と街巡り・浦和2022」連携事業

フォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす ―浦和から埼玉への視座―」

2022年3月20日（日）16:30～18:30 埼玉会館大ホール

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団　　後援：埼玉新聞社
協力：美術と街巡り・浦和実行委員会

ー　記　録　目　次　ー

司会・進行（松永康）・・・・・1

第一部：基調講演・事例発表

浦和建築塾から「埼玉の建築スケッチ」へ（青山恭之）・・・・・2

絵の原点は高砂小学校での野本昌男先生・・・・・2

「近代建築史への旅スケッチ展」に出展する神楽坂時代・・・・・3

うらわ建築塾で招いた西和夫先生に学んだ建物地図スタイル・・・・・4

ヒューマンスケールの通り抜けの道がある浦和・・・・・5

浦和は街中アートに満ちている・・・・・7

埼玉に戻って仕事もスケッチも充実・・・・・8

「つきのみちくさ」でアトリエ・リングに集う・・・・・9

埼玉県内のすべての市町村を網羅した建築スケッチ250へ・・・・・11

明治時代の浦和をスケッチする・・・・・・12

昔のランドマークをリノベする・・・・・・14

「文化的連続性」につながる「美術と街巡り・浦和」の活動・・・・・15

「訪ねたい場所・使い続けたい建築」（若林祥文）・・・・・17

街角に佇む建築は私たちの記憶を醸成　・・・・・17

建築当初の意図が使い続けられていく中で変わっていく建物・・・・・18

世界にひとつしかない場所を依頼して設計された進修館・・・・・18

今のニーズを満たしながら当初の面影を残す嵐山カントリークラブハウス・・・・・19

市民ボランティアが案内する埼玉会館見学ツアー・・・・・20

繊維工業試験場の精神を受け継ぐ市民の文化拠点、入間市文化創造アトリエアミーゴ・・・21

社会に巣立つ青年のイメージが湧く加須げんきプラザ・・・・・21

愛される建築を目指した土屋巌と面白い建築を県内にも残す池原義郎・・・・・22

埼玉県内にある素晴らしい建物の分布図があるホームページの活用を・・・・・22

「埼玉会館」の取り組み（山海隆弘）・・・・・24

前川建築としての埼玉会館を再評価する建築セミナーの実施・・・・・24

市民ボランティアや美術家が埼玉会館の魅力を発信・・・・・26

時代に応じた改修でいつまでも生き続けるたてもの・・・・・27

時代が移っても古びない佇まいと埼玉百年の文化が息づく埼玉会館・・・・・27

第二部：ディスカッション（松永康、青山恭之、若林祥文、山海隆弘）

建物を生かすための人づくり、組織づくり・・・・・29

岡田信一郎から前川國男へ、ピアノ発表会の思い出からの文化的連続性・・・・・30

「あさひ通り」は浦和に住む人の生活に欠かせない「みち」だった・・・・・31

***本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。**

「美術と街巡り・浦和2022」連携事業

フォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす ―浦和から埼玉への視座―」

2022年3月20日（日）16:30～18:30 埼玉会館大ホール

松永康　**まつながこう（アート・コーディネーター）**

1957年、埼玉県生まれ。1981年、武蔵野美術大学卒業。埼玉県立近代美術館学芸員、国際芸術センター青森総括主任学芸員、横浜美術短期大学（現・横浜美術大学）非常勤講師、井（Jin）ART画廊（上海）芸術監督を経て、現在、NPO法人コンテンポラリーアートジャパン理事、武蔵野美術大学非常勤講師。2016年より「美術と街巡り・浦和」の展覧会部門を担当する。

本日はお忙しい中、この会場にお集まりいただき、ありがとうございます。私はこのフォーラムの司会をさせていただきます美術と街巡り浦和・実行委員会の松永と申します。よろしくお願いいたします。

今ちょうど浦和駅西口周辺で「美術と街巡り・浦和」という催し物が開かれています。美術展を中心とした「美術展プログラム」は、公共の展示室や美術画廊などを使って美術家や画廊など美術の専門の方々を中心に組み立ててゆきます。一方で市民活動を行なう方々が中心の「展覧会を盛り上げるプログラム」は、これらの美術展を利用して「ガイドツアー」であるとか「浦和宿たてもの50」、「街を飾る」といった催し物を行うことでそれぞれの活動を展開させてゆきます。「美術と街巡り・浦和」はこれら二本立ての催し物となっております。

さらに「展覧会を盛り上げるプログラム」の「浦和宿たてもの50」に関連して、埼玉会館の第１展示室において「埼玉の建築スケッチ原画展」が開かれています。これを展示してらっしゃるのが青山恭之さんです。青山さんは埼玉新聞に、埼玉県内の歴史的建造物を紹介するスケッチをずっと連載されていました。

埼玉会館はご存知のように前川國男の設計によるもので、歴史的に非常に重要な建物です。そこで埼玉県全域にある歴史的建造物がどのように生かされ、残されているのかを一緒に考えてみようということになって実現したのがこのフォーラムであるということであります。

本日はまず第一部の事例紹介で、青山恭之さん、若林祥文さん、山海隆弘さんにお話をいただきます。青山さんには埼玉県内のスケッチ、いろんなところに残された建物をスケッチされているので、そういったことをお話しいただくことになります。若林さんは埼玉県内にあります重要な建物をずっと調べておりまして、何冊か出版物も作られております。山海さんは元埼玉会館の館長で今はシニアアドバイザーということになっております。それぞれの方々に自らの経験を交えてそれぞれの建築がどのように残されているのかをお話しいただくことになります。

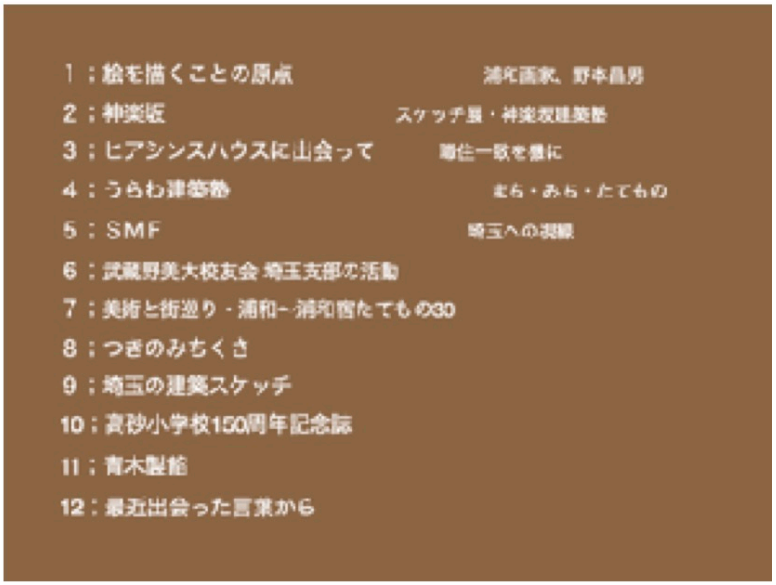
第二部は、ディスカッションという形で進めさせていただきます。

それでは青山さんの方からお願いしてよろしいでしょうか。

浦和建築塾から「埼玉の建築スケッチ」へ

青山恭之　**あおやまやすゆき（建築家）**

1958年、旧浦和市生まれ。武蔵野美術大学大学院修了。妻の永田博子とアトリエ・リング一級建築士事務所を主宰、スペース「つきのみちくさ」を運営。武蔵野美術大学、埼玉大学等での非常勤講師を経て、現在、ものつくり大学非常勤講師。浦和建築塾代表。美術と街巡り・浦和実行委員会代表。青少年育成浦和高砂地区会会長としても活動。



今日の話は、大体なんで僕が絵を描いているんだっていうことから始めてみます。こういう建物のスケッチのスタイルができてきたのは、実は神楽坂の建築塾がスタートなんです。それから実はその頃東京に住んでたんですけども、浦和に戻ってきてからヒアシンスハウスの活動に出会って、それが浦和建築塾だとかSMF（Saitama Muse Forum/あなたと どこでも　アート実行委員会）だとか、武蔵野美大の県の同窓会の活動なんかも含めて、だんだん埼玉に活動が広がっていく。その過程で埼玉新聞にスケッチの連載っていう話をいただいて、今日の展覧会に至るわけです。それと並行しながら、建築の設計が本業ですから、建築の話もちょっと含めて、最後に最近やった高砂小学校との関連の仕事、それから近いところで動いているプロジェクトや最近出会った言葉みたいなものまで、お付き合いください。

絵の原点は高砂小学校での野本昌男先生

スライドで１番のところ。「絵を書くことの原点」ですが、さあこの絵がパッと思い浮かぶ人は少ないかもしれないんですけれども、先ほどこの絵の前を通ってきた人も何人かいるんじゃないかと思います。野本昌男という人の「白壁の家」。昭和29年に日展に出した作品で、ここ埼玉会館の廊下に飾ってあります。実はこの作者が僕の絵の先生でありました。これが僕の高砂小学校の卒業アルバムなんですが、面影ありますかね？

なんか小利口な少年みたいな感じがしてるんだけど。これが校長の岡登先生、担任だった藤橋先生で、この方が野本先生ですね。次に野本先生が描いた岡登校長の肖像画です。高砂小学校はなんと校長先生がお

辞めになる時に、油絵が残っていくんですね。校長室はホント、美術館みたいになっていまして、野本先生も高砂の歴代の校長の肖像画を残されています。これを描いたのが野本昌男。加須のお生まれなんですね。加須っていうのは、いろんな美術家を出しているし、今でも造形教育が盛んなところなんですけれども、この人は寺内萬治郎さんの教え子ということです。ご存知のように浦和画家の中心的な存在だと思うんですけれども、寺内萬治郎門下が野本さんで、その門下が僕だっていうことで、僕の中に少しでも浦和画家の伝統がDNAとして入ってるんじゃないかというのが、実はちょっと誇りなんです。

これは、僕が小学校4年生の時、1968年に描いた30号の油絵で、結構でかいんですけれども、この絵は実はうちの玄関にずっと飾ってあって、今は僕の書斎にあって、いつも自分の机に向かう時に目の前にこの絵がある。僕は全く画家ではないんだけど僕を支えてくれてる、自分が小学生のころの思い出の絵です。

「近代建築史への旅スケッチ展」に出展する神楽坂時代

その後の中学、高校、大学とちょっとすっ飛ばして、勤め人になった頃は、もう東京に住んでいて、神楽坂のAYUMIギャラリーというところで、「近代建築史への旅スケッチ展」をやってたんですけど、それに初めて出したのがこの大宮の博物館。これ、皆さんご存知ですよね。ここと同じ前川國男の、埼玉会館よりちょっと後の作品です。それをそのスケッチ展のはじめに持っていきました。そのスケッチ展は25回ぐらい歴史を重ねてるんですけれども毎回出してまして、こう振り返ってみると、画面で黄色く示したところが実は埼玉県内の建物なんです。住んでたのが東京だったので初めはあんまり気にしなかったんですけれども、書き始めてみてやっぱり埼玉県内のものも残していきたいなという、そんな気持ちが芽生え始めて、少し意識して埼玉県内の建築を描き始めるようになりました。それがだんだん溜まってきたのが埼玉新聞の目に止まったっていうのがあの連載のきっかけだったと思います。

神楽坂っていうのは、建築の塾、建築の勉強会をやっていて、そこのスタッフみたいになってやってましたので、塾生のみんなとスケッチをしたり街歩きをしたり。この同じ大隈講堂の絵でも２、３日早稲田に通って描いたのもあれば、街歩きをしながら5分ぐらいでパパっと描いちゃうような絵もあって。そんなものをこの日本住宅新聞という業界紙にちょっと書きました。新聞に絵を描いて文章を添えるっていうことの出発点はこの辺にあると思っています。

うらわ建築塾で招いた西和夫先生に学んだ建物地図スタイル

その後、浦和に14年ぶりぐらいで戻ってくるんですけれども、実は浦島太郎状態になっていまして、浦和のことを何も知らないっていうことに気づくんですね。だけど、昔ここにあったあの店はもうなくなっているけど、どうしちゃったんだろうとか、そういう喪失感みたいなのがありました。

そんな中で、ヒアシンスハウスの活動に出会います。この写真はヒアシンスハウスをつくる会が立ち上がった時の第１回目の集会の写真です。建築だけじゃなくていろんなジャンルの人が集まって、もう今はないものを作ってやろうというこの発想の転換がすごいなと思って。その活動に直接関わったわけじゃないんですけども、その周辺をウロウロしているうち、2004年には完成します。

この絵は、僕が新聞の連載が始まる時に、やっぱり第１回目はこのヒアシンスハウスだろうと思って選んだ絵です。連載の開始は2012年ですから、建物ができてからずっと後なんですけれども。

そういうことで、あのヒアシンスハウスの会の中の建築メンバーの方々と一緒に動き始めたのがこの「うらわ建築塾」という活動で、2007年からかな。そこで連続公開講座を始めることになって、神奈川大学の西和夫先生を第１回目の講師にお迎えしたんですね。その時の西先生のプレゼンテーションが、僕のそれ以降の街歩きやその街と建物の関係を考えるひとつのスタイルになっていくんです。

これが西先生の研究室で浦和の中山道を調査したもので、建物の様子を地図の上に写真として置いていく。これが僕のスタイルになって今も続いてきています。浦和の詳細を知らなかったもんですから、とにかく歩かなきゃいけないってことで地図を片手に赤鉛筆で「この道は歩いた。次はこっちを曲がってこっちの

道は歩いた？歩いてない？」とかって言って。特に鹿島台のあたりは執拗に一本一本の路地を見落としたものがないか確かめながら歩いて行った。それを記録に残すということで、その頃にグーグルマップっていうのが出始めて、インターネット上に自分で作った地図が残せるっていうことができ始めたので、それに飛びつきまして記録を載せたものです。

これは中山道の部分を拡大して見てるんですけど、やっぱりなくなってしまうものがあるんですよ。そうすると常に更新しようと心掛けていたんで、「あそこ、壊されちゃって」って思うと、赤い枠に変えてそれがどんどん増えていきました。

今はストリートビューというのがあって、その道のところの写真が見えますけれども、そのストリートビューも更新されていっちゃうと昔のものは全部消えちゃう。だから昔、何が建っていたかっていうのは、わからなくなっちゃう。マップの方ではバックナンバーが残っているんですけれどもね。なくなった建物も記録しておくっていうのが大事だなと思います。

これは、ネット上だけでなく、みなさんにお見せする機会を作ろうということで、2008年6月に「埼玉・住まいの会」と一緒にこの街並みのことを展示させていただいたものです。今、「浦和宿たてもの50」の展示でやっている表現の出発点です。グーグルアースの航空写真を貼り合わせて大きな地図を作って、そこに建物をマッピングしていく。それで浦和の街の面白さとか、よく見えるんですね。

ヒューマンスケールの通り抜けの道がある浦和

この真ん中が中山道で、裏を繋いでいるサービス道路がある。これが大宮だと全部、碁盤の目状になって真っ直ぐに出来ているんですけれども、浦和の場合は、たとえばこのイトーヨーカドーの先の「力（りき）」の角からずっと入っていく道がくねくねとうねっている。西側もそうなんですけど、ガクガクガクッと折れ曲がったりしながら、本当にヒューマンスケールで変化していく。これで、浦和もいいところだなと思ったわけです。このように地図に建物の情報を重ねていくことで、見えてくるものが

あるなって感じていました。

例えばこれは、常盤公園がここで、中山道の向かいのこの辺りがとても面白かったんですね、当時は。

左側が中山道でこう入って行くと、途中に倉があったりする。この折れ曲がるところに井戸があるんですね。そこをまた折れ曲がるとその向かいに社（やしろ）がある。お稲荷さんなのかな？そこをまた右へ曲がって、ここに生垣のある道がある。そこがとてもヒューマンスケールで、またこう折れて、さらに折れて。要するに、中山道から見ても見通せない。裏の道から見ても、見通せない。だから、中に住んでる人たちのプライバシーが守られる。もちろん、通り抜けられるから行けるんですけれども、やっぱりちょっと分からない。ちょっとよそ者は入れない道。そういうのが都市に仕掛けられているわけですね。

これも今はこんな感じで、ヒューマンスケールの細かいあの建物群がひとつのマンションになる。この町屋のうなぎの寝床のような細長い敷地というのは、マンションに好都合で、さらにこれを二つか三つ束ねるとさらに大きなマンションができる。ドミノマンションって言ってますけど、どんどん増える。

まあこんな道だったんです。左の写真は、中山道から入るところで、何があるのかなって感じですけど、入ってみると、こういう倉があったりして、井戸があったり社があったり生垣の道があったり。当然、車は通れません。建築基準法上、道でもなんでもないし。だけど、人が歩くにはこれで充分なわけですね。

そういう中山道から裏へ通り抜ける道っていうのがあちこちにある。例えばこれはある雑誌に出てたんですが、真ん中は裏門通りで、ここの賑わいは、今ももちろん健在ですね。左下に描かれた中銀座は、今のナカギンザセブンっていう合築ビルになる前もよく覚えてますけど、魚屋さんとかいろいろあって、魚屋さんのどじょうが木の樽に入っていてぷかぷか浮いてきて泡を吹くんで、あれが子供の頃に面白くてよく見入ってたんです。それがあのビルになってもその通り抜けは維持されてたんですね。

次にこれは皆さんご存知かな、あの名店センター。昭和39年に浦和で初めて中山道沿いに建った６階建て高層建築。地下は確か、スーパーマーケットが入っていて、レジに並んで買うっていうのを、僕はここで初めて体験したような気がするんですけれども。１、２階が店舗でその上がオフィス・スペースですかね。それで１階は「もくせい通り」って言ってましたけど、通り抜けられる。中山道沿いに細かいお店が並んでたのが、今はこのように、車のサービスの入り口みたいになっちゃったんですね。東側はスターバックスでしたっけ？そういう喫茶店が入って賑わいを演出していますけど、この街道に面して、こういうサービス道路が突然現れて、一定の間口を取ってる。中山道の景観の中ではこれでいいんだろうかってちょっと思いますけど。とにかくこの「抜ける」っていうのが生活している者にとってはとても大事だったと思います。車だけじゃなくて、人が抜けるっていうことが大事。

浦和は街中アートに満ちている

そうやって浦和の街をいろいろ調べて回っていると、ヒアシンスハウスの会が成長したSMF（サイタマ・ミューズ・フォーラム）という近代美術館を拠点にしている活動と関わるような形になって「青山君、街歩きやってよ」っていうことで半日ぐらいかけて歩きました。建築や彫刻や絵画、街の中にあるアートを巡るっていう散歩のスポットが、この時、実は103個もあったんです。そのぐらい浦和には面白いものが満ちていた。というか今もほぼありますけれどもね。

例えばこれは、その散歩を元にして作った地図です。浦和をやった後、大宮の地図を作って、そして川越を作ってというふうに発展していくんですけど。これは今でもSMFのホームページからPDFでダウンロードできます。

この地図にある、あの白鷺宝の花見さんの看板が、3日前だったかなあ、あそこの前を通ったら下ろされてましたね。それでびっくりして、あそこの再開発がとうとう始まるんだなと思ったんですけど。この看板は、人間国宝の増田三男さんの作品なんですね。増田先生というのは浦和高校の時の工芸の先生です。ホント、学校の先生で人間国宝がいるってすげーなって思いましたけど。その人の看板が下されました。これが今度、どんな形であそこに戻るのか、楽しみにしたいと思ってるんですけど。

埼玉に戻って仕事もスケッチも充実

そうやって大宮や川越をやってというふうに少しずつ埼玉に意識が広がっていくと同時に、僕の設計の仕事も都内などから少しずつ県内の方に移ってくるんですが、ひとつのきっかけが、この加須の家っていうのを設計した時です。埼玉県でも北の方、利根川が支配するような平たいエリアに農家を設計するっていうのは初めてでしたから、非常に力を入れて設計しました。そういう風土とか地域性みたいなことを意識して、あと、熱環境のこともかなり意識したものですから、埼玉県の環境建築住宅賞を頂いた。そういう場所や風土ということを意識するようになったアトリエ・リングの作品の中でも重要な作品です。

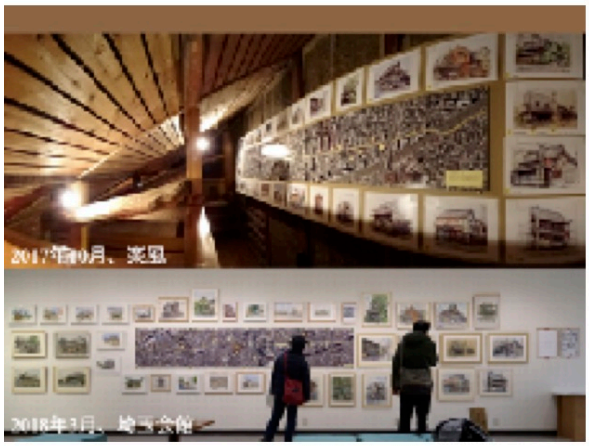
そのころ、川越で武蔵美の同窓会の全国大会を「今年度は埼玉県がやってよ」ということで川越で開催しました。これはスカラ座という古い映画館を主会場にしてシンポジウムをした時の写真です。おかげさまで、このときは蔵造りの道に面した服部民俗資料館というギャラリーで、実は「埼玉の建築スケッチ原画展」っていうのをやらせていただいたんです。このときは数も少なかったんですけども、埼玉新聞の連載が一旦87回で終わった時のタイミングだったと思うんですけど。この原画展は、皆さん「新聞で見るのと全然違うよ」と言って下さってすごくうれしかった。このギャラリーの前の道で描いたのがこれなんです。ギャラリーでスケッチを展示している作者が、そのギャラリーの軒先でスケッチしてるっていうのはなかなかいいと思いませんか？で、2日ぐらいかけて描いていたんですけど、鉛筆でだいたい全部仕上げたつもりでいたら雨が降ってきて、その雨も最後に入れることになった絵です。

さて、これは自分の住んでる家なんですけれども、これを設計した時に、やっぱり街に対して閉じるのではなくて見通せる。さっきもそういう話をしましたけど、町からこう奥に入って行くような。路地はやっぱり街のヒダを体感するっていうのかな？平面的に見えるファサードの連続じゃなくて、奥行きなり、通り抜けできたりする空間。そういうのって大事なんだろうなっていうのを自分の家の設計の時に生かそうと考えたのが、この「通り庭」と言ってる場所です。

それが、2016年から始まった「美術と街巡り・浦和」で、そこに美術家の人たちが彫刻を置いたり、絵を飾っ

たり、上からオブジェを吊るしたりとか、さすが美術家の人だといろんなことをして、設計者が思いもよらなかった展開が出てくる。それが面白くて、毎年3月のこの時期になると、３人とか４人の美術家が乗りこんできて勝手に好きなことをやってくれる。すごく楽しかったんですけど、家族の人には迷惑をかけたりしたと思いますが、たまには自分の家の庭に一般の人が入ってくれるのも面白いなと思って。

これは、今「たてもの50」と言ってますけど、それがまだ「たてもの30」だった時代、コバルト画房という浦和画家たちがずいぶん世話になった絵の具屋さん、額縁屋さんのちっちゃいギャラリーなんですけど、そこに例の昔作った航空写真を持ってきて、その回りに僕と齊藤祐子さんと磯崎正幸さんと三人の絵を並べるっていうことの出発点になった展覧会です。それを次の月だったかな、岸町公民館で飾るっていうことで、その時は原画ではなくて画像をスキャンしたものを使いましたけど。それでコンパクトにまとめることができたので、「楽風（らふ）」っていう、うちの本家がされている喫茶店がありますけど、そこの廊下のところに展示しました。次の年には晴れて埼玉会館で全部のスケッチを原画でやる。この時は下地になっているグーグルアースの画像も新しいものに更新して少し大規模なものにして展示させていただきました。



これは高砂小学校の、「街をかざる」っていうシリーズ。これも地図の上に絵を貼るスタイルで、このときは下地の地図は本太中学校の美術部の子たちに作ってもらって、その上に高砂小学校の子供たちが、はがき大の「街の自分の好きなところ」っていうことで絵を貼ってもらう。それを「美術と街巡り」の街歩きの時に見てもらう、発表してもらう。そんなことをやりました。

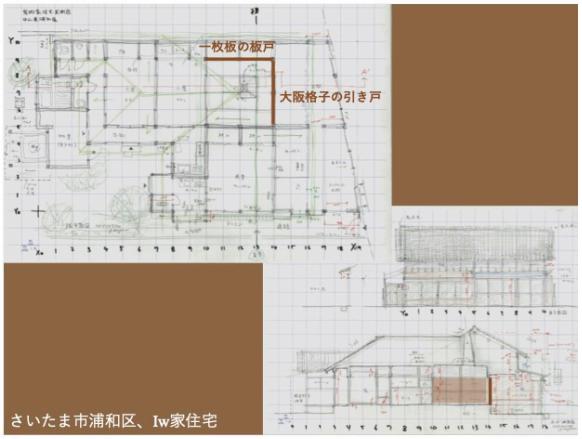
その流れで国際芸術祭をやったタイミングで、たまたま高砂小学校が150周年だったので、浦和駅が付き合ってくれまして、「浦和駅の未来を考える」ということでいわゆるコラボみたいなのをやりました。高砂小学校の150周年の宣伝もさせていただいたり、改札の中のコンコースでは「街をかざる」シリーズのパネルも作って、これもいろんな人に見ていただけたと思ってます。

「つきのみちくさ」でアトリエ・リングに集う

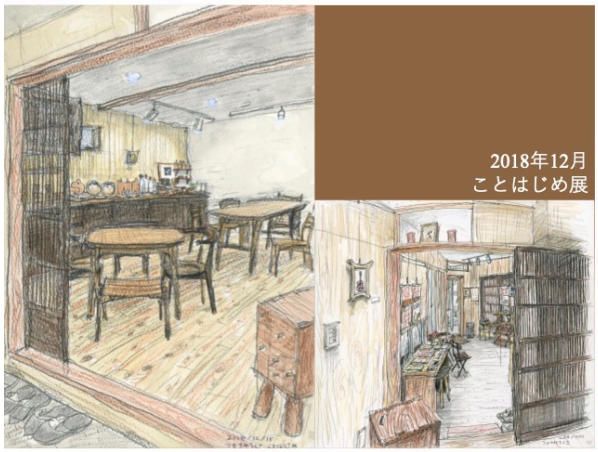
次は少し自分の設計の話に近づきますけど、「つきのみちくさ」という調神社（つきのみや様）のすぐそばに建てたアートスペースっていうかフリース

ペースです。１階がフリースペースになっていて、２階に住宅が入ってる。１階は土間と板の間っていう二つの空間があって、それぞれがいろいろに使えるようになってるんです。その設計のきっかけになったのが、このスケッチにある中山道に面した「Iw家」と書いてありますけど、明治時代にできた町屋です。そこが壊されるのに際して測量させてくれるというので、測量した平面図がこれですね。これが立面と断面ですけれども。それで中にいい建具があったんで、「この建具どうするんですか？」って聞いたら、「捨てちゃう」って言うから「じゃ、ください」って言ってもらってきたんですね。それがこの上の八畳間に面した一枚板で、上下合計８枚の建具と、こっちの土間から畳に上がるところの「大阪格子」っていう細かい縦格子の引き戸を４枚。これをもいただいてくることができました。それを高さ調整して新しい設計の中に取り込んだんです。日本の建築ってそういうことが自由にできるのはいいなと思います。

さいたま市浦和区、Iw家住宅、明治20年代〜2015解体



さいたま市浦和区、Iw家住宅


2018年12月
ことはじめ展

これが「つきのみちくさ」がオープンするときの展覧会で、三人の家具・木工作家とうちの事務所とここを施工してくれた榊住建さんの五つのグループで合同展をやってます。その時のスケッチがこれです。

その木工作家の方は三富新田の雑木林の木で家具を作ったりとか、そういう地域の活動に関わっていらっしゃって。彼があそこの雑木林の活動をまとめた「武蔵野」っていう映画に参加しているんですけども、その映画をみんなで見て、かつその映画を作った原村監督本人も来ていただいて、ここでディスカッションするっていうようなこともやりました。

2019年3月
美術と街巡り・浦和
2018年12月
ことはじめ展

これは次の年の「美術と街巡り・浦和」で三人の作家が板の間の空間と土間の空間をまたいで使った時の写真です。

「つきのみちくさ」は、アトリエ・リングの自主企画みたいのもやろうということで、これはそのパンフレット。調神社にあやかって、つきのみやの話をそこでするんだったらやっぱりお月

2019年9月 つきのみ夜話 Vol.1

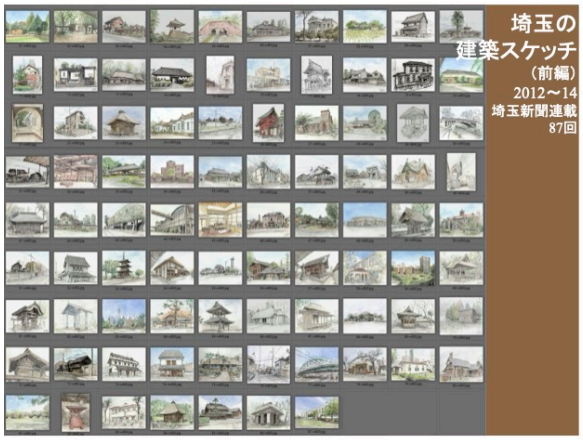
2019年11月 つきのみ夜話 Vol.2

見の日だよねっていうことで、お月見に合わせて「調神社をめぐる天文と民俗」っていう題で、茨木孝雄さんという天文学にも民俗学にも詳しい人に来ていただいて、お話を聞きつつ月見団子を子供達と一緒に作って食べる。いろんな世代の人に楽しんでもらうという、展覧会でも講演会でもない、ワークショップとかいろんなことを絡めてやりました。ここで取材しているのが近所の一女のアナウンス部なんです。

それから、このときは「たてもの50」で一緒に関わってくださっている原田紀子さんのコーディネートで、浦和に残っている職人さん、伝統木構造の会津屋工務店の嶋澤章さんに来ていただいて、そういう大工さんの話を聞きました。関連して、その会津屋工務店の敷地の中に移築されてきた、かつて浦和宿の田中榮三郎さんっていう酒屋さんにあった離れを見せていただくっていう現地視察と、それから土間の方では会津屋工務店の大工道具だとか古い図面、浦和の監獄の図面が出てきまして、真ん中に平面がバッテン型の監獄があるんですけど、そういう貴重な図面だとかを展示。それからたてもの応援団で測量した常盤屋酒店の報告書とその時に大工さんが描いた原寸図とか、そんなもろもろの技術を紹介するような展示もしました。

埼玉県内のすべての市町村を網羅した建築スケッチ250へ

それでちょっと前後しますけれども、これは「埼玉の建築スケッチ」の前編が始まるときの半年分ぐらいのものです。紙面を見ていただくと、結構白黒が多かったですね、はじめは。そういうものだろうと思って見てたんですけれども、やっぱり紙面になることだけでも嬉しかったものです。それから結構反響もありましてね。小学校を書いたら、そこの卒業生から「実は、この小学校、近々壊すんです」とか、そういう情報をいただいたり、別所沼の向こうにある内木酒造っていう酒屋を描いたら、そこの社長から電話がかかってきて、この絵を是非売ってほしいとか、そういう嬉しい反響も届いてきたりしたんです。多少紙面が小さくても、僕もだんだんワクワクしてきて、初めは１年で



終わるはずが２年ちょっとかかって87枚。最初のヒアシンスハウスから一番最後の高砂小学校まで、僕が思い入れのある建物を紹介させていただきました。

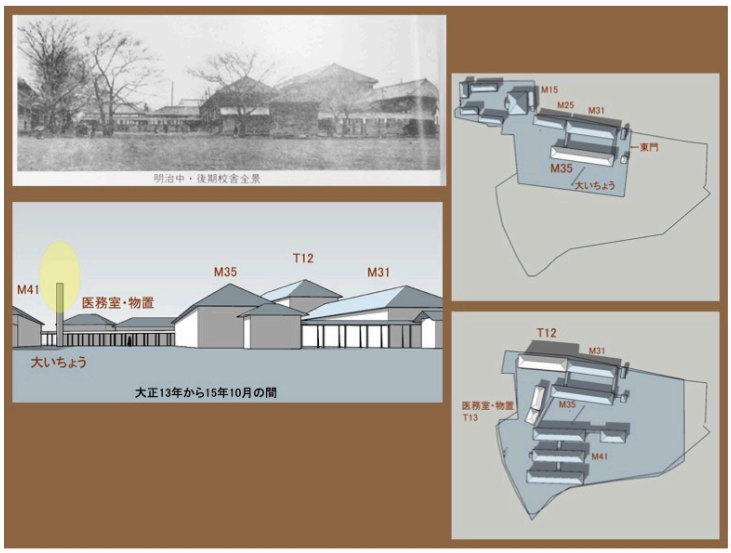
これは現在進行中の続編で、この真ん中の一番下の玉蔵院地蔵堂がおととい掲載され、今回の搬入の日の夜にスキャンして紙面を昨日の朝にここの展示会場に展示しました。2020年1月、今度また連載が始まって色々描きに行けるなと思ったらコロナが始まってしまったんですね。県内の移動でも、ちょっと電車に乗るだけでドキドキ。それでもなんとか苦心しながら、「まあ県内だからいいか」と思って動き回ったのがこの玉蔵院で106枚目で現在進行中。予定通りに行けば来月の15日にあの大宮の煉瓦倉庫の絵が出て、一応110になる予定でいます。

この原画は展覧会場で、皆さん、見ていただいたと思うんですけれども。県内すべての市町村からのスケッチが揃ったのが去年の終わりごろでした。最終的には、前編の87枚と合わせて、250くらいまではいく予定でいるんです。今日見なかった方はまたぜひ後日、見てください。

挿絵、明治30年代前半の浦和尋常小学校と浦和の街

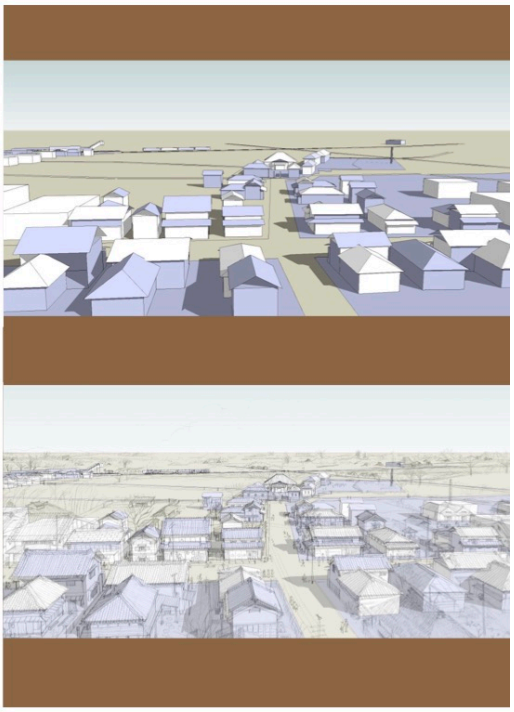
明治時代の浦和をスケッチする

もうひとつ、最近、力を入れた絵がこれなんですけど。高砂小学校開校150周年記念誌で、その表紙の裏に見開きで描いた挿絵です。なんでこんなの描いたかというと、その150周年記念誌の編集チームに入らせていただいて歴史編を編集してたんです。それで、僕だけ建築畑の人が入ってたんで、じゃあ、その150年間の校舎の変遷を辿ってまとめてみようかと。年代毎にいろんな図面はあるんですけど、それを一貫して同じスケールで同じ方位で、同じ表現でずっと150年を総覧してみるっていうことを一度もやったことがなかったので、それを3Dモデルにしてやってみたらどうかということで。一応、高砂小学校を卒業したし、高砂小学校に育ててもらったようなところがあるんで、それこそ絵も高砂小学校で教わりましたし、それで大変なエネルギーをかけて基本的なかたちだけですが３D化していきました。



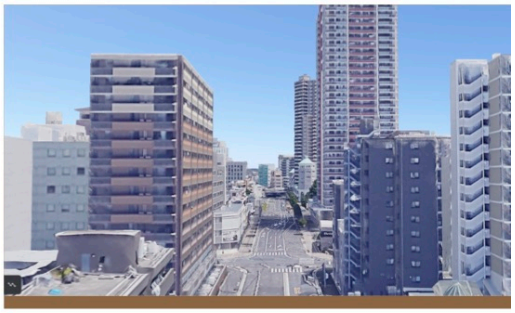
この左上に出ているのが、明治中期から後期ぐらいの校舎全景だという、ただ一つしか残ってないような校舎の全景を表した写真があったんです。明治の時代はこんなのだったのかって？初めは何気なく見てたんだけど、なんか二階建てみたいのが写ってるぞと。二階建ては大正12年になっ

て出来たはずだって。そういう事をいろいろ疑問に思い始めて、それをつきあわせてくると、その時系列で作った3Dモデルの中で、この右下にあるこの段階、ここに大正12年の二階建て、ここに影が長く出てるんで二階建てってわかりますけど、どうもこの時期らしいと。それで3Dモデルですからどっちからでも見られるんで、校庭側から見てみると、どうもこの写真に合致するんじゃないかということで。この建物が大正12年だとわかっている。若い人はご存知ないと思いますが、軍国主義化していく時代っていうのは奉安殿っていうのがあって、高砂に奉安殿ができるのが大正15年10月というのもわかっている。この写真には奉安殿は写っていない。だからこの写真を撮ったのは、大正13年から15年10月の間っていうことが判明したんですね。これは高砂の長い150年の歴史を本としてまとめる作業をしている中で、歴史に触れた瞬間、歴史を僕はいじれたっていうか、今日のフォーラムの題名じゃないですけど、実際のものを、ハードをいじるだけじゃなくて、心の中にある何かソフトをいじるってことも大事なんじゃないかなと思ってるんですよ。



それでせっかく3Dモデルを作ったので、それをいろんなところから見てみようと。これは明治35年の校舎ができた時の3Dモデルなんですけど、それじゃもうちょっと「大いちょう」と校庭の関係から考えて、この前の段階でちょっと向きを西の面から見たように。手前のここが中山道なんですけども、当時の文献だとここの道を小学校通りって言ってた。中山道から小学校通りの突き当りに校舎が見えた。この時代で道を入力してみる。CADでやっているので、入力するのはデータさえあればすぐできるんで、それをやって、地図から少し周りの町なんかも入力していく。そうするとこんな感じになるんですね。一戸一戸の町屋はデタラメじゃなくて、明治のその頃の中山道沿いの町屋を何軒か測量しているデータがあるんで、それを使って、ここにはこんな家が建ったんじゃないかって、ある程度は想像して。でも駅はこっちの方向にちゃんと見えて、汽車の大きさも3Dモデルで数値化して入れ込んで見る。すると、だいたいこんな街並みがあったはずなんだと。これを少し絵にしていこうってやっていくと、こんな絵ができてきたんですね。

さらに、僕が勝手にいろんな物語を、多分こんな生活が町の中で展開してたんだろうなっていうのを色づけしていってできたのがこれ。高砂小学校を「愛で」て、それを自分なりに「いじって」みて、それが高砂小学校の卒業生たちの中に「生きて」くれればいいかなっていうことで。だからハードだけではなくて、ソフトの面も大事だっていうことなんです。



実はこれ、今の風景と比べるとこうこんな感じなんですね。せっかくここまで100年かけてこういう街ができたんだから、今あるものは残して、もうここにあるものを壊さないでいこうよって、とても思いますけど。東京の都心なんか見ると50年経ってない高層ビルが壊されるっていうような、そういう時代ですから。そこで多大なCO2が問題になるわけですけど、それでなるべく古いものを残そうよっていう活動の一つを紹介します。

11；青木製餡

昔のランドマークをリノベする

これが旧中山道で、田島大牧線はずっとこっちにカーブを描いて国道17号まで行くんですけれども、ここが埼玉会館で県庁がここにあって、そのちょうど三角形みたいなところにあるこのエリアが青木製餡っていうあんこ屋さんです。僕ぐらいの人になると、このあんこを食べたことがあるっていう人はいるかもしれないんですが、ただ、今みんな、周りがどんどんマンション化していく中で、ここだけ本当に中庭があっていっぱい木があって残されているんですね。そしてここに東西に長い倉庫があるんですよ。ここを今、貸倉庫で使ってるんですけども、その店子の契約が近々終わってしまうっていうので、じゃあその後何とか使う手はないかと。リノベっていうんですか、どこまで関われるかわかりませんけど、ちょっと考えているところなんですね。

実はこれ、若林さんが一番初めに紹介してくれたところで、防空壕があったり、柿の木がいっぱいあったりと、いろいろと関わりはじめたのが2013年かな。もう10年近く前になりますけど、今度やっとその倉庫のリユースっていうのか、それが動き出すかなっていうところです。

この写真が南面から見ていて、こんな煙突がまだ残ってるんですけど、もしかすると、周りがマンションになっちゃってるから気付いてない人がいるのかもしれない。昔だったら絶対ランドマークだったんだけど。お風呂屋の煙突っていうのはランドマークでしたよね。だから浦和でこんな煙突が残っていることすら知らない人がいるかもしれないけど、これももしかしたらそろそろ壊すかもしれない。

この庭に、夏祭りでお祭りのお神輿が入ってくるんですよ。暑くてみんな疲れてるから、ここで冷たいものを飲んだり、シャンシャンシャンって手拍子やったり、そういう地域の大事な場所なんですけどね。

これはその倉庫の中です。トロッコのレールがちゃんとあって、ものを運ぶのにここからトロッコに乗せて持っていくとすごく楽なんですよね。これを活かして、これにカメラ乗っけて映画の撮影じゃないですけど、なんか現代的な使い方はないのかなとか。この会場でぜひ、何とかこう使ったらどうかってアイディアがあったら教えて欲しいんですけど。

「文化的連続性」につながる「美術と街巡り・浦和」の活動

最後に、朝日新聞に毎朝書かれている「折々のことば」から、ダニエル・ベルっていう社会学者が書いたものを、鷲田清一さんが引き抜いてきてくれたのが目に留まって、最近ちょっと心に引っかかった。ここに「文化的連続性」という言葉があるんですよ。これは僕、この文章の前後の文脈も知らずに、この文化的連続性ということだけなんか引っかかってしまって、これは何か僕らがやってることのすごく大事な、なんか理論的なバックボーンになるんじゃないか？みたいな気がしたので、この「アステイオン」第75号っていうのを手に入れました。これがその全文なんですけど。そんなに長い文章じゃないんです。この文章が書かれたのは85年でかなり古い文書なんですけれども、読んでいくと、あのロシアには市民社会が成立してなくてというような、ものすごく今日的なことが書いてある。

ちょっと紹介すると「市民社会とその強固な文化的連続性を意識することが大事なのだ」ということを主張されているんです。「日本にもその地域的な自生の感覚が強くありました」って書き始めで、「明治で天皇制から云々」っていうことで、その市民社会が破壊されたという歴史がある。西洋のように強力な宗教勢力が日本にはなかったけど、文化の連続性は強力な美的伝統を通じて保持されてきたと論じてるんですよ。これはね、僕らが「美術と街巡り」をやってるすごく大事な根拠のひとつになるんじゃないかと思って。

やっぱり日本人は美意識の中で、市民の連帯感じゃないけど連続性みたいのが培われてきてるんだっていう。それは宗教的でも強力な権力でもなんでもないんだっていうことが書いてある。

全文を読みたい方はアトリエ・リングのホームページのお知らせのところに載せておきますので、もちろんアステイオン第75号を買っていただいてもいいんですけど。

最近、よく僕が住宅のことを考えながら思い浮かべるのは、「住む」っていう言葉が、水が澄んでいる状態の「澄む」と同じ語源なんだっていう話。誰がこれを言い始めたかよくわかりませんけど。水の流れは速過ぎても濁流になってしまうし、遅すぎても腐敗し淀んでしまう。適度に流動し、均衡した状態が必要になるんだと。

それは生物学者の福岡伸一さんが、動的平衡っていうことを言ってるんですけども、それがすごくパラレルになる言葉で、人間の体の細胞ってどんどん変わっていて、ある時期で入れ替わってしまうわけですよ。だから、少し前の自分っていうのは、その物理的な意味ではいなくなるんだけれども、でも僕は僕のままでいるっていう。そういう動的平衡の状態。

つまり、都市でそういう動的平衡を支えるのが文化的連続性なんじゃないかって思うんです。「たてもの」や「みち」にはその連続性が目に見えるような形で刻まれている。それを大事にし

なきゃいけない。それで日本は文化的連続性が美的伝統を通じて保持されてきたとすれば、浦和画家の伝統を持つこの街で、「美術と街巡り」のような試みは、市民社会の維持と活性化に少なからず貢献しているって考えられないかって。手前味噌たっぷりですけど、なんかいいように解釈すると僕らがやってることもただの浮かれた美術家の遊びではないぞっていうことを少しだけ声を大きくして言いたいと思って、僕のお話とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

「住む」とは「澄む」と同義。
水の流れが速すぎると、砂や泥をまきあげて澄んだ状態にはならず、
また遅すぎても、濁りが生じてしまいに腐敗してしまう。
適度に流動し均衡した状態が必要。

生物学者・福岡伸一の「動的平衡」理論
細胞は絶えず入れ替わっても、ひとつの生命体はその全体を維持する。

そういった「動的平衡」を支えるのが、文化的連続性なのではないだろうか。
まち・みち・たてものには、それが目に見えるかたちで刻まれている。

また、日本で文化的連続性が美的伝統を通じて保持されてきたとすれば、
浦和画家の伝統をもつこの街での「美術と街巡り…」のような試みは、
市民社会の維持と活性化に少なからず貢献しているとは考えられないか。

END

松永：どうもありがとうございました。あっという間だったんですけど、いろんな内容を含むお話だったと思います。「文化的連続性」という言葉ですね。これも非常に考えさせられる。どんなに形が変わっても文化が連続しているということですね。今日の青山さんのお話の中で、じゃあ浦和の文化ってなんなのかっていうことを考えたときに、「街の奥行き」っていう言葉がとても気になりました。浦和に住んでいる人、そして外から来る人。この二者が出会うときに、関係によってグラデーションがあるんですね。表で済んでしまう人、もうちょっと中にまで入れる人、もっと奥まで入れる人。相手との関係によって奥行きのグラデーションが持てるってことですね。それはとても浦和っぽいなっていう感じが私はしました。つまり、建築の話で言えば、やっぱり建築っていうものが人間の精神を形作っていく、そういう感じがとても今日、青山さんの話で感じることができました。

　じゃあ、引き続き、若林さんの方からお願いいたします。

「訪ねたい場所・使い続けたい建築」

若林祥文　**わかばやしあきふみ（都市づくりNPOさいたま副理事長）**

1950年、埼玉県生まれ。元埼玉県庁職員。現在、NPO法人MCAサポートセンター理事ほか。共著として『懐かしの街さんぽ　埼玉』（懐かしの街さんぽ製作委員会）、『埼玉モダンたてもの-きまぐれ散歩』（埼玉県）。近年、「美術と街巡り・浦和」のガイドツアーを担当している。

街角に佇む建築は私たちの記憶を醸成

私が発表をさせていただくのは、埼玉県内の訪ねたい場所＋使い続けたい建築ということで、埼玉県のNPO基金の助成を令和３年度に受けました。去年の7月ぐらいから受けて作業をはじめました。それで「訪ねたい＋使い続けたい建築選定事業」という取り組みをしました。ウェブを作って、公表をしてますので、ぜひ見ていただけたらと思います。

埼玉県NPO基金の助成を受けた
「訪ねたい・使い続けたい建築選定事業」の概要

- webについて　「訪ねたい・使い続けたい建築
- 　　～　開かれた使い方をしている埼玉の戦後建築」
- ねらい　「訪ねたい」＋「使い続けたい」というテーマの解説

- 現在83件。今後、100件以上を目標に増やしていきたい。
- WEBの概要：建築諸元シート、コラム記事、分布地図で構成する。
- WEBの制作：太田正夫氏(建築写真）が担当。
- 選定作業にあたって、複数で現地に行き、マイナスではなくプラスで評価。
- 都市づくりNPOさいたまの会員+関心の高い人達でグループをつくる。
- 執筆者：伊豆井秀一氏（美術評論）、高松敬氏（建築史）、太田正夫氏（建築写真）、古里実氏（建築教育）、若林祥文

では、どういう視点で「訪ねたい、使い続けたい」ということを考えたかということを発表します。対象としているのは1950年代から2000年代にかけて建てられ開かれた使い方をしている建物、公共的な使い方をしている建物。必ずしも自治体とか政府機関のものだけではなくて、それがかなり多いですけれども、民間の建物の中でも開かれた使い方をしているものがありますので、そういったものを取り上げてみました。

現在このホームページに載っているのは83件です。今後、100件以上にしていきたいなと思っています。そしてWebは、建築諸元のシートとかコラム記事とか分布地図で構成しています。Webの制作にあたっては、STEP-imageという会社を経営されている建築写真家の太田正夫さんにお願いしました。

こういった建物を選定する際に、つい、あれがいいとか悪いとか、いろいろ言いたくなるのですけれども、悪いっていう点はやっぱり言いたくないっていうのが、私どもの信条でして、マイナスではなくプラス評価をしながら、やっぱりそこに残って町の中に建物があるっていうことをプラス評価をしながら載せてきました。

私は「都市づくりNPOさいたま」っていうさいたま市内に拠点があるNPO法人に属しておりまして、20年ぐらい経ちます。そこのメンバーの中の関心の高い人、それからさらに日頃こういったことに関心のある人達に声をかけまして、「この指止まれ」的にチームをつくりました。伊豆井秀一さん、高松敬さん、太田正夫さん、古里実さん、それと私。書いた人間はこの５人ですけれども、他にも一緒に訪ね歩いた人はいます。

そういう中でどういうことを話をしてきたかというと、我々の問題意識っていうのは、やっぱり「街角に佇む建築は、私たちの記憶を醸成してきた、作ってきた」という思いがありまして、それをどう個々の建物の中で探していくかということがありました。そして次の点は、我々のグループの中でも議論になったのですが、「愛される建築と使い続けられる建築」、この違いはどういうことなのかなということを考えました。

建築当初の意図が使い続けられていく中で変わっていく建物

自治体がつくる建物について言うと、今の時代ですとメンテナンス費用がかからないとか、なるべく安くとか、あるいは目立たないとか、そういうことがあります。だけど、1950年代からこれまでをずっと見ていくと、1980年代ぐらいになりますとバブル景気がやっぱり建物にも大きく影響しているのか、かなり華やかな建築も県内にいろいろ見受けられます。そういった建物が、今どういう風な使われ方をしているのかなっていうことを訪問しながらいろいろ思いました。

建築当初の意図。建築家の意図、それから施主の意図。やっぱり自治体であっても、目立つように作りましょうよとか、いい意味で、これからまた紹介しますけれども、世界にひとつしかない建物をぜひ造って欲しいという気持ちのあるところとか、そういういろんな思いを込めて建物ができます。ただ、それが使い続けられていく中で、いろいろ変質していきます。うまく引き継いでいる建物もありますし、そういう意味では、メンテナンスがうまくいかなくてどうなっちゃったのかなって思う建物もあります。そういう当初の思い、それから使われている時の気持ち、そしてこれからのこととか、今はそうしたことを考える大事な時期に、いい時期に来てるのかなって思います。

ひとつ具体的に申し上げますと、公共的建物っていうのは、以前は自治体が作って自治体が管理してということが普通だったんですね。ところが、指定管理者制度ができたことによって、所有する人と管理する人が分離する、主体が分離しているわけです。ここの埼玉会館も埼玉県庁が造ってますけれども、現在、埼玉県芸術文化振興財団で管理されています。ここの場合は、私はうまくいってると評価をしますけれども、実はなかなかうまくいっていないところも、建物を見ていると結構あります。そんなところの視点も、これから建物を考えていく上では重要なことかと思っています。

そこで、いくつか建物を具体的に、特に脈絡なく、アラカルトという感じで紹介させていただきます。

世界にひとつしかない場所を依頼して設計された進修館

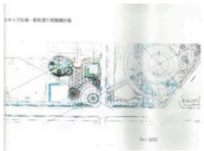
宮代町にある進修館という建物です。今から40年前に建てられました。1980年、昭和55年です。それで、この建物は、東武動物公園駅西口からずっとまっすぐな道路を行くと、徒歩３～４分の所で出会う風景です(①)。こういったちょっと変わった建物で、これが進修館です。前に丸い広場ができています。

平面図を見ますと、駅はこちらの方向ですね。今の東武動物公園駅西口広場前には無印良品店ができまして、かなり注目を浴びてま

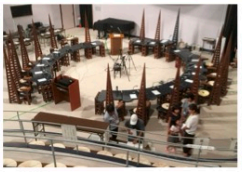
アラカルト：　訪ね歩いてみた　多様な取り組み

◎「進修館は世界に一つしかない場所。」の理念を追い続けている。建物から外に飛び出してアウトリーチ的に街と人々の気づきを収集し、重ねている。

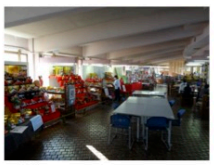
①



②



③



④

⑤

す。そして、この円形広場の中心は、筑波山と富士山を結ぶ大きな軸線の中で位置が決まっています。ということで、実はこれができたことによって、次に裏側にあるスキップ広場もひとつの軸線になってる(②)。ひとつの建物で完結しているだけではなくて、その次の建物、次の構造物へと連続しながらこの街の構造を造っていくっていうのが、こういう建物の面白さかなと思ってます。

この建物は、ちょっと変わった建物で、どっからでも入れます。そして当時の町長さんが、宮代町っていう目立たない町なんですけれども、ここに世界にひとつしかない場所っていうものを造りたいという思いを建築家に告げました。それを役場の町会議員の方とかいろんな方に絶えず問いながら造られた建物です。

そのひとつのシンボル的なものだと私は思っているんですけれども、これは建物の中にある小ホールの、ある時期の写真です(③)。いかがでしょうか？何の写真だか、おわかりでしょうか？これは町の議会が開かれたときの椅子の配置です。ぐるっと円形になって、この端っこのちょっと飛び出てるような、なんか魔法使いが座っているような椅子ですけども、これがそれぞれ議員さんの座席なります。ひときわ高い椅子が、議長さんのお席とかです。

実は、この椅子のひとつは、３、４年前にイタリアのヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展という建物の大会がありまして、「日本の暮らし」というテーマの中に、わざわざイタリアのヴェニスに持って行って飾りました。なので、この建物の中の椅子などの家具類は、この進修館を見るときには注目していただきたい重要なものです。

そしてこれは２階の細長いラウンジ(④)ですけれども、いろんな使い方をしています。そしてこの写真はちょうどこの広場に面しているところにアルコーブ(⑤)がありまして、これはマルシェの時の写真ですけども、教会の回廊のようなちょっとした良い雰囲気があって、いろんな使い方をしています。

そしてこの建物も今現在、指定管理者制度になっておりますけれども、実は町民の中にも知っているけれどもあんまり行ったことがないとか、あの建物はあんまり好きじゃないとか、そういう人もおりますので、建物って当然動かないものですけど、建物の意味を知ってもらうためにはどういう風にしたらいいのかと考えて、ひとつは建物から外に飛び出してアウトリーチ的に、人と街の方にいろいろ働き掛けをしています。例えば、各自治会ごとに「街のアルバム」というアルバムを、皆さんが家の中に持っている記念写真的なものを出していただいて、街のアルバムというのを作って、みんなで展示をして思い出を話す。そういう事をいろいろやっています。

また、つい最近、コロナ禍の前だったんですけれども、進修館の中で、年代によっていろんな使われ方をしているということでアルバム作りをしました。これは日本工業大学の勝木先生の研究室のホームページを見れば、その辺のところが見れます。

今のニーズを満たしながら当初の面影を残す嵐山カントリークラブハウス

次は嵐山カントリークラブという有名なゴルフ場です。このゴルフ場は、アマチュア・ゴルフの名門ゴルフ場なんですけれども、1961年にできました。この建物は、1961年ということですから、それから高度成長期がずっと続いて、経済が昇り調子になってゴルフ熱もずっと高まってきました。そうすると会員数も増えますし、当時、男性が主だったのが、女性でゴルフを楽しむ方もいらっしゃるということで、増築などを重ねてきました。こういったゴルフ場のクラブハウスは、埼玉県内にもたくさんあります。そしてかなりの有名建築家の方も、埼玉県内のクラブハウスを設計されてますけれども、増築に増築を重ねて見る影もなく、面影がなくなっちゃったっていうところもあるようです。

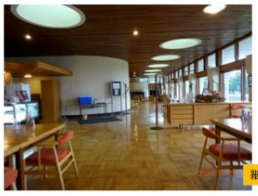
これが建てられた当初の完成の建物。これが南側ですけども、どうでしょうか(写真①と②を比較)。

ちょっと注目していただきたいのは階段の位置です。当初は真正面に階段はありません。ちょっと脇にあります。ところが今は、建物のど真ん中に階段があります。それからこの写真にはありませんけれども、この裏側も色々と改造されております。

◎ 「嵐山カントリー倶楽部ハウスのリノベーションの取り組み」
建築当初の姿の再生を目指してオーナー、施工会社、建築家が緊密な連携で粘り強く取り組む

①

当初写真：メグロ建築研究所から借用
②


継承と改善で明るいラウンジを構成
③

④

実はここが他と違うところです。50年経ってみて、この二代目のオーナーの方は、この建物を壊して立て直すかどうかを悩まれたそうです。そこで、「いや、やっぱりこの建物ってすごくいいと思ってるし、もう一度、会員の方に聞いてみよう」ということでアンケートを取った。そしたら、やっぱり「残すっていうことがいいんじゃないでしょうか」っていう声もかなりあった。このゴルフ場は会員制ですから、いろいろ議論をしましたが、「じゃあ残すということで舵を切ってみるか」っていうことを考えられた時に、ある会合でこのオーナーの方が、メグロ建築研究所の平井さんと山口さんのお二人にお会いになった。そこで、そんな話が出たところ、たまたまこのメグロ建築研究所は、この建物を設計された天野さんの系統の人だったとか、本当に偶然が重なりまして、改造の話が進みました。

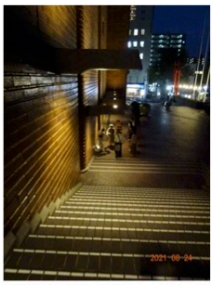
そしてここがすばらしいところなんですけども、当時この建物を造った施工会社、白石建設がずっとこの建物に携わっていた。オーナー、建築家、施工者の三者が、何とかこれを残す方法はないだろうか。今のニーズを満たしながらも、そういうことができないだろうか。ちょうど震災前の年に考えまして、かなり分厚い緻密な報告書を作って会員の方にお見せして、会員の方のコンセンサスを得るようにしてステップが動き始めたということです。

今、まだ10年ということで、実はもう10年ぐらいかかるだろうというふうに思っていらっしゃいます。建物は決して昔に戻すんじゃなくて、今のニーズを満たしながら、なおかつ100年の記念日を迎えたいっていう思いで、今、進められています。

市民ボランティアが案内する埼玉会館見学ツアー

次はここ埼玉会館の事例ですけれども、この建物はいろんな切り口で、山海さんが館長をされた頃から、開かれた使われ方として、いろんな取り組みがされてました。そういう中のひとつの成果が、彩の国探検隊ということで、昨日も行われてましたけれども、建築を愛する方が自らこの建物のことを勉強されて色々案内をされます。もとは東京都美術館（前川國男が設計した美術館）と東京藝術大学が10年前にコラボし

◎「埼玉会館を市民目線で案内する彩の国探検隊の活動」
前川建築を愛する市民たちがその思いを伝える見学会を開催する。



手製の陳瓦模型で解説

て、アートを市民に開く「とびらプロジェクト」を行って、その卒業生たちが主力のメンバーだというふうに聞いておりますけれども、そういった形で市民の方が自分の好きな建物、愛する建物とどう関わっていくかというひとつの良い事例じゃないかと思っています。

そしてこれがさらに願わくば、埼玉県内にある前川國男建築である大宮公園にある歴史と民俗の博物館、それから長瀞にある自然の博物館、そういったところへと発展していただけないかなと思います。前回ここで３館によるパネルディスカッションが行われたというふうに聞いておりますけれども、今後の展開が楽しみです。

繊維工業試験場の精神を受け継ぐ市民の文化拠点、入間市文化創造アトリエアミーゴ

もうひとつは、入間にある文化創造アトリエアミーゴという建物です。この建物は大正5年の建物でして、この地域は織物産業の非常に盛んだったところで、その織物産業を支えるための研究施設っていうか、染色とか織り方とか、いろんなことを研究する繊維工業試験場がありました。それが1998年（平成10年）に閉鎖されました。

◎ 「入間市文化創造アトリエアミーゴは　街の記憶を語り継ぎ、
新たな市民の文化の創造発信拠点を目指す」

のこぎり屋根が伝えること

文化創造の場への転換

継承と市民創造の場の発信

「じゃあどうしようか、やっぱり残そう」ということを思って、市役所とここを利用された市民の方が、「どういう使いかたをしたらいいか」を話し合った結果、「文化の創造発信拠点にしたい」となりました。

一般に公共施設になりますと、ただ単に場所貸しになることが多いですけども、そうじゃなくてここは、かつて繊維の産業を支えてきた試験場なんだからその精神も受け継ごうと。それでこれからはやっぱり市民の文化なんだっていう発想になり、今、こういう形でいろんな活動をして運営されています。

ここも指定管理者制度になっており、NPO法人入間市文化創造ネットワークが当初からここを管理してまして、単なる場所貸しはしていません。文化創造するための地域のコミュニティを作るためには、どういうふうな情報発信がいいだろうかっていうことを常に考えながら積極的な運営をされてます。そして市役所も、きちんとバックアップしています。

社会に巣立つ青年のイメージが湧く加須げんきプラザ

もうひとつ、これはちょっと私のかなり思い入れを入れたページなんですけども、加須にある「げんきプラザ」。昔の「青年の家」なんです。

これは1980年代の初めの頃に、私もここで１、２回合宿したりしたことがありますが、改めて今回見に行きました。ちょうどここは改修工事が行われて、建物を洗浄した直後でした。いろんなほこりが溜まってるのを洗ってみたところ、すごく壁が輝いて見えるんで

◎「加須げんきプラザ(旧青年の家）が込めた「青年」の姿を探ってみる」
高度経済成長期を迎える若者たちに伝えたメッセージの建築デザインを採集する。

一見単調な表情に多様性を醸す釉薬タイル

親密さを演出する空間構成の語る場

場の空気を読む・空間の切り替え「結界」

す。この単調な側面の壁が100mもあるような、非常に平板な白い壁なんですけども、よく見るとそのタイル一枚一枚の表情が光線によって見えてくる。

そうするとこの建物から私が受けたひとつのメッセージは、ここは青年の家ですから、大人になるっていうことは退屈さもあるけれども場合によっては輝く時もあるとか、そんなイメージが読み取れたらと、私なりの思いでこの建物全体を見てみました。

つまり勝手な思い込みですね。そうすると、いろんなところに「青年」になって、さらに社会に出ていくといういろんな思いがここでは読みとれるのかな。詳しくは、このホームページに載せたコラムを読んでいただきたいのですけども、語らいの場であるとか、あるいは沈黙の意識をしなさいとか、それは結界っていう場の作法です。それから女性がピアノのところに座っている彫像があったりして、どういう意味を持つのかなっていうふうに考えるだけでも面白いかなと思ってます。

愛される建築を目指した土屋巌と面白い建築を県内にも残す池原義郎

埼玉県内で活動した建築家として、土屋巌　「親しまれる建築」と
池原義郎　「日常の先を示す建築」を取り上げた。

土屋巌氏　（1932年　浦和生まれ。）

A：鶴ヶ島市市立中央図書館

池原義郎氏　（1928年から2017年）

B：早稲田大学所沢キャンパス本部棟

最後のページになりますけれども、埼玉県内でいろんな建築家が活躍されてます。その中で、今回はふたりを取り上げました。ひとりは土屋巌さんっていう1932年の浦和の生まれ。浦和高校から東京藝術大学に行かれました。この方は面白い方で、先ほど青山さんが紹介された増田先生と交流を持たれて、浦高生が藝大に入れるようにいろんな特訓をされたというような逸話の持ち主です。土屋さんは埼玉県内に数多くの建物を設計してますけども、公共建築物でもかなり面白いものを作りまして、目立たないけども愛される建築を目指した。ご存命ですけれども、この写真は最晩年の鶴ヶ島市立中央図書館です(A)。非常に面白い建物で、子供たちが喜ぶような建物です。

もうひとり取り上げた建築家は、池原義郎さんです。この方はもうすでに亡くなられていますけれども、全国的に活躍された方で、デビュー作品が所沢聖地霊園です。実は所沢霊園の前に池原先生は、川島町にある遠山記念館の新館を今井兼次さんが設計されたんですけども、その方の助手をされてました。そしてしばらく、いろんな西武鉄道系の建築物を設計されていました。この写真(B)は早稲田大学所沢キャンパスで、この丘陵の地形を生かしながら造られている建物です。

建築当時、自然保護運動が盛んでして、所沢の狭山丘陵のところにも埼玉県で自然保護運動をリードする団体がありまして、そういう方々と話し合いをしながら提案をした地形を活かした建物です。その他、埼玉県内にある建物としては、熊谷市にある熊谷文化創造館です。この建物も大変面白い建物です。

埼玉県内にある素晴らしい建物の分布図があるホームページの活用を

最後に、これがホームページです。この「地図から見る」っていうところをクリックして、こんな感じになります。

これで、全分布図を見ていただいて、例えば一番山奥のところは秩父山地の山の奥にある「ふれあいの森林科学館」、大変素晴らしい建物です。そんなところで、皆さんに見ていただきまして、埼玉県内にいろんな建物があるっていうのを楽しんでください。どうもありがとうございました。

松永：どうもありがとうございました。若林さんでした。

建築物っていうのには建築物特有の魅力があると。ただし、その魅力ある建築がそのまま残されていくか、うまく使われていくかどうかは、例えばアミーゴの例や、それからゴルフ場の例であげられたように、それを運営していく組織作りが非常に重要になるっていうのが、とても今の話の中から感じました。

（休憩）

松永：後半第二部に入っていきたいと思います。それでは埼玉会館をめぐってこの地域との関係、埼玉会館をさらに生かしていくためにどうしたらいいかという話に入っていきたいと思います。それにあたって、まず山海さんの方から埼玉会館ではどのような取り組みを行っているかということをお話いただければと思います。よろしくお願いいたします。

「埼玉会館」の取り組み

山海隆弘　**さんかいたかひろ（公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 シニアアドバイザー）**

1991年、文化庁新進芸術家海外研修制度によりウィーン国立歌劇場おいて劇場音響を研鑽。93年、（財）埼玉県芸術文化振興財団の技術職員となり彩の国さいたま芸術劇場の劇場技術運営に携わる。2016年より埼玉会館館長。翌年のリニューアルオープンを機に、前川國男設計による埼玉会館のPRに努める。21年より現職。

山海：よろしくお願いします。私は去年まで、埼玉会館の館長をやっていましたが、今はシニアアドバイザーという立場で引き続き仕事を手伝わせていただいておりますので、ここでお話をさせていただいております。

今日のテーマ、「まち・みち・たてものを愛でる・いじる・生かす」ということに沿って、埼玉会館ではどういうことをしているかをお話しさせていただこうと思います。まず「愛でる」ということでは、埼玉会館がどういうところなのか、どういう建物なのか、あるいはどういうことをしているのかなど、いろいろ皆さんに知っていただくことで、愛していただけるのかなと思っています。それで、建築セミナーとか、先ほども若林さんからもご紹介がありました見学会などをやっております。それから「いじる」ということでは建物とアートで戯れるエスプラナード展、今開催中ですが、これがひとつ。あとライトアップをしてここからメッセージを発したりとか、埼玉会館の建物を利用していろいろと皆さんにメッセージを発するというようなことも「いじる」というのにあたるのかなと。それから「生かす」ということですが、この建物は1966年に建てられて、今2022年ですから約56年になります。もう50年以上経ってますから、当然50年前のニーズとずれてきている部分、あるいは設備とかのニーズも変わってきてますので、設備機器の入れ替えとかも含めて今に合った内容のものに更新しているということがあります。

それらの例を少しご紹介したいと思います。

前川建築としての埼玉会館を再評価する建築セミナーの実施

これはセミナーをやった時のチラシです。平成26年（2014年）に第１回のセミナーを始めました。50年をそろそろ迎えるという時に、この大規模改修工事の話が出て、その当時の館長がどういう方針でこの埼玉会館の改修を行えばいいかということを模索するにあたり、まずは前川建築というものをきっちり掘り下げてみようじゃないかということから、このセミナーを始めたと聞いております。第１回のチラシのデザインの絵は青山さんのスケッチです。これをお借りしたのがきっかけで、当時の館長が青山さんに初めてお目にかかったと聞いております。

右側が第２回。2015年のときは、この大ホールの音響についてちょっと体験をしようというこ

とで実験を交えてやっています。次の年2016年は、ここが改修工事の期間で休館になっていたので、セミナーの場所を移して、同じ前川建築の「歴史と民俗の博物館」で実施をしました。ここ埼玉会館との共通点に、壁を覆う打ち込みタイルや外の床面に小さいタイルで模様が描かれてますけど、そういうところを含めて、現地で解説していただきました。

そしてこちらは第４回2017年の5月、ちょうど大規模改修工事を終えてリニュアルオープンをした時のテーマです。その時にちょうど、ル・コルビュジエの西洋美術館が世界遺産に登録されたということも話題になっていましたので、前川國男の師匠と言われるこのル・コルビュジエはどういう人なのか？近代建築とは一体どういうものなのかをテーマに設定しました。そこで、「ものづくり大学」にル・コルビュジエの「カップ・マルタンの休暇小屋」のレプリカがあるんですが、それを造られた八代克彦先生にお話を伺って、次に前川國男との関係を前川建築設計事務所の所長、橋本功さんにお話をしていただきました。

次は「近代建築は人間の建築」というタイトルで、前川國男自身についてもう少し掘り下げようということでやったのが第５回です。それから第６回は、より一般の人に広く埼玉会館を知ってもらおうということで、この音楽を聴く場としての大ホールにスポットを当て、前川國男の作った音楽ホールの特徴を探ろうと、東京文化会館、神奈川県立音楽堂、熊本芸術劇場、国立音大の講堂など、前川國男が手がけた音楽ホールについて解説をしてもらいました。そしてここ埼玉会館の大ホールで実際にこの響きを聴いてもらうために、地元のマリンバ奏者の塚越慎子さんにご出演いただきました。この時はなんと、この建築セミナーに700名以上の参加があって、一般の人にも関心を持っていただけたのかなということを実感した企画でした。

第７回の時は、あの頃、埼玉会館がファッション雑誌のロケ地として頻繁に使われていまして、今もよく撮影場所に選んで来られますが、そこで、この埼玉会館のどこが若い写真家の人たちの目をどういうふうに惹きつけたのか、その写真家の人も招いてこの埼玉会館の魅力を探ろうということをテーマにしました。ファッション誌で紹介されたページの一部をチラシデザインにも使わせていただきましたが、なんとなくかっこいいですよね。何気なく普段見ている建物ですけど、こういうふうに外で、あるいは中でプライベートな写真を撮っても結構、背景として使える場所があるんだなということが改めて感じていただけるかなと思います。なので、是非こんなことにも利用していただけるのかなと思ったりしてます。

第８回は、埼玉県に３つある前川建築、この「埼玉会館」と「歴史と民俗の博物館」、「自然の博物館」の３館の特長を一挙に解説していただこうと、昨年秋にやったものです。真ん中にQRコードがありますので、ここから埼玉会館のホームページを開いていただき、そこにある「ライブラリー」というコーナーでこの５回目、６回目、７回目、８回目の講演の記録が閲覧できます。ぜひお時間のある時に、どんな内容の話だったのか、ご覧いただければと思います。

市民ボランティアや美術家が埼玉会館の魅力を発信

その他に、「埼玉会館の魅力展」を開催し、埼玉会館の建築当時の工事写真とか、前川建築設計事務所からお借りしたこの埼玉会館の図面を展示したりしたこともあります。それから、埼玉会館を一般の人に身近に感じてもらえるようにと、先ほど若林さんのNPOの中で写真担当としてご紹介がありました太田正夫さんに、建築写真の撮り方を手解きしていただくというようなこともやって、これは引き続き、建築写真撮影ツアーとして継続しています。

またDOCOMOMOジャパンというモダニズム建築の保存に取り組む世界的な組織がありますが、その団体からこの埼玉会館も215番目の残すべき建築物として選定され、プレートをいただきました。このプレートは埼玉会館の地下１階の入り口を入ったところの正面にある全館案内板の下に貼ってありますので、ぜひご覧いただければと思います。

これは建築見学ツアーの風景ですね。先程、若林さんからもご紹介があったんですが、市民ボランティアガイドによるものです。ガイドの人達はできるだけ皆さんに和んでもらおうということで、クリスマスのツアーではサンタさんの格好をしたり、夜間の納涼ツアーでは浴衣姿でやったりしました。去年から始めたところなので、まだ回数は多くないんですが、毎回募集するとかなりの数の応募があるんですね。ただ、今はコロナ禍なので、１グループ５人ぐらいずつしか受け入れられないので、末長くやることによって、多くの方に埼玉会館を知っていただけるかなと思っております。

それから埼玉会館をいじるというエスプラナード展は今回が４回目になります。今年の作品は今、外に行けばご覧いただけますけど、こういったものも過去に、展示してきました。これは埼玉会館エスプラナードに洗面器に水を入れて置いたものです。上から見ると、雫の形をしていたんですね。こういったことを埼玉会館の建物を使ってやって、市民の皆さんに親しんでもらってます。こういった木の置物も、昼間に見るとかわいかったんですけど、夜になるとちょっと不気味な感じがして、なかなか面白い作品でした。

時代に応じた改修でいつまでも生き続けるたてもの

大ホール客席椅子の更新と客席通路部に手すりを設置し、ユニバーサル化

小ホールホワイエにトイレを増設し、車椅子利用者や高齢者に配慮

それから時代にあった施設の改修というのは、例えば、この客席通路の手すりがあります。近年、どこのホールでも高齢の方の来館が多くなってきてましたので、階段に手すりが設置されるようになりました。こういった取手も、今まで丸く握ってひねるタイプだったのが、指一本ひっかければ簡単に開くようなタイプに変えたりとか、トイレを洗浄便座にして綺麗にしたりとか、いろいろ改善しているんです。小ホールのトイレはこれまではホワイエの地下にあるのをご利用いただいていたんですけど、階段を下りて行くよりは同じフロアにあったほうが良いということで増設しました。いろいろと今の時代にあった改修を施しています。

握力の弱い人にもやさしいレバー・ハンドルタイプのドア・ノブを採用

もちろん舞台裏の設備は年々、新しく良い技術が開発されてきますので、音響にしても照明にしても、最新の演出に見合ったことができるような設備を導入しております。それから、空調のコントロールシステムですけど、当然古くなってくると効きが悪くなってきたり故障も多くなってきますので、こういった最新の設備を入れて快適に過ごせるように、しかも省エネという工夫もされています。館内の照明器具もLEDに変えたり、こうした省エネの設備にしたことによって、光熱費は約二割から三割ぐらい削減できてるんですね。ということで、時代にあった設備の改修っていうのも大事な要素かと思います。

音響設備のデジタル化で新しい舞台芸術にも対応

各諸室は個別に、ホール客席はエリアを分けて空調環境を改善

時代が移っても古びない佇まいと埼玉百年の文化が息づく埼玉会館

埼玉会館が今、どうして評価されているのかっていうと、これはセミナーのときに前川建築設計事務所の橋本所長が作られた資料の一部なんですけど、これを見ると、1932年に最初の前川建築、木村産業研究所が出来て、最後が1986年で石垣市民会館までありますが、この長い歴史の中で埼玉会館は実はここ、真ん中にあるんですね。埼玉会館はちょうどこの前川建築の歴史の中の真ん中にあって、初めて建物全体をタイルで覆った建築物なんです。たくさんの前川建築はいろんな賞をもらっているんですが、埼玉会館はその当時は何も賞をもらってないんです。けれど、今こうやって見ると、非常に大事な分岐点にあった建物なんだということがわかると思います。つまりこれ以降は、大宮の歴史と民

埼玉会館建築セミナー資料
前川建築設計事務所長橋本氏作成

俗の博物館とか、東京都美術館もそうですし、打ち込みタイルで建物全体を覆うことが当たり前になってくるのが分かります。そんな話をセミナーで色々と知ることが出来たんですね。

日本の公共ホールの歴史を見ると、大阪市の公会堂が1918年に出来ていまして、日本青年館が1925年にできています。そしてこの建物の前の初代の埼玉会館が1926年なんです。日比谷公会堂が1929年ですから、日本の公会堂、公共ホールとしては非常に早い時期にこの埼玉会館という施設ができているんですね。そういう意味でも、大正時代から埼玉県民あるいは市民の皆さん、浦和の地域の皆さんの生活に密着した存在だったと言えるんじゃないでしょうか。そしてこの前川建築の現在の建物は、昭和、平成、令和のどんな浦和の街並みにも溶け込むような存在になっているんじゃないかと。

昭和の最初に建てられた時から時代が流れても、今なお埼玉会館が皆さんにこうして利用していただいているし、今後も利用していただける建物として、いつまでも使い続けていきたい建物として、我々運営サイドも、常に、いろいろ努力をしているという一例をご紹介しました。ありがとうございました。

第二部

松永：はい、ありがとうございました。
　埼玉会館は日本でも最も長い歴史を持った公共建築のひとつであるという。そしてそれを維持していくために、いろんな努力工夫がなされてきた。そして、その組織作りにこれがどうつながっていくのか、その辺の話は、この後つなげていけそうかなという気がしました。

建物を生かすための人づくり、組織づくり

　それでは皆さん、ちょっと上にあがっていただいて、お話を続けたいと思います。
先ほど、皆さんのお話を聞きながら、まず青山さんの話の中で、建物と形作られる街それ自体が、そこに住む人々の精神構造を作っていく。それこそが文化であるという内容を私は感じました。次に若林さんの方からはその建物自体を維持していくためにはどうするか、維持もしくはそれを改修しながらでも維持していくためにどうするかっていう時に、人的な組織が非常に重要になるのではないか。そして、最後の山海さんの話を聞きながら、実際、職員の方が中心になって、いろんな人脈作り、人とどうやってつなげていくか、そういうものをいろいろな実践を通して工夫していらっしゃるんだなあっていうのがわかってきました。
　ただ、私が聞いてちょっと思ったのが、本当に今、埼玉会館の方では色んな人といろんなイベントを開いている。写真のイベントを開いたり、それをインスタ映えするんだということを示していたり、あと建築見学ツアーを開いたり、セミナーを開く、それから前川建築同士のネットワークをつくっていく。そういうことをやっているようなんですけど、それが今、具体的に何か組織化されているっていうことはあるんでしょうか？

山海：全国の前川建築をつなぐ近代建築ツーリズムネットワークというのが、弘前市に事務局を置いて９自治体がつながってるみたいなんですけど、どの程度の活動になっているのかはちょっと僕もわからないんですが、少なくとも僕らの現場レベルでは、まずは近いところで埼玉県の３館にはこれからちょっと一緒にまたやって行きたいねということでコミュニケーションを取り始めたところですね。まあこれからっていう感じです。

松永：その辺でちょっと若林さんが見てきたところで、ゴルフ場であるとか、さっき言ってた「入間市文化創造アトリエ」あたりではそういった人的組織がうまく回転しているからこそ、維持されているような話に聞こえたんですけれども、どんな感じで？

若林：先ほど申し上げましたように、作った人と管理してる人は、今、分離している傾向がどんどん強くなっています。しかも、特に公共施設の場合には自治体財政がすごく厳しくなって、メインテナンス費用が十分に確保できないという状況です。だけど、建物はどんどん劣化してく。劣化していくとやっぱりお客さんがいなくなる、少なくなってくる。そういう悪循環に陥る可能性があります。先ほど取り上げた建物でもやっぱり同じ傾向をしてます。
　そこで今、ひとつの面白い取り組みとして動いているのが進修館でして、そこではファンクラブを作りまして、それは市民に限らず都内の方とか、それこそ象設計集団という特徴的な建築を設計された集団があるもんですから、その日本全国のファンの方が、そこで自分たちのお金を出し合って、場合によってはこの前もありましたが、そこは木造のサッシなんですね。そこで劣化してるパテをみんなで修繕してみようとか、力を出すとか、そういったことで少しでも建物が長持ち

するように、また自分達もそこに関わることのうれしさというのを演出しながら、やり始めた。それが今、これからのひとつの面白い流れになって、ほかの建物にも普及すればいいなと思ってます。

松永：そのファンクラブっていうのは、具体的にどういう人たちが集まっているんですか？

若林：建築好きです。建築家だけじゃないです。それこそ女性の方が多いですね。それから進修館をよく利用されている地元の方。何かもう少し自分たちも身を入れて使いたいとか、いい提案をしたい。指定管理者になっているMCAサポートセンターというところは、町の方とうまく仲を繋いでこうしましょうとか、いい会話ができている。そこが大事だと思うんですね。

松永：そういうのって、最初は「進修館」の方で働きかけて組織化して行くっていうか、・・・

若林：実は進修館というのは先ほど申し上げましたように、できる時に当時の町長の斎藤甲馬さんっていう方がすごく面白い方で、没後に斎藤甲馬さんを顕彰する会「甲馬サロン」が年に２回開催されてきています。そういうひとつの下地があった。そのメンバーが引き続いてファンクラブの主体になってきたと思います。これはちょっと特殊な事例かもしれませんけれども、建築はどこかいいものを探せば出てくるのです。特にここ埼玉会館は非常にいい例だと思うんですけどね。だから、そこはこれからが楽しみな分野じゃないかなと思ってます。

岡田信一郎から前川國男へ、ピアノ発表会の思い出からの文化的連続性

松永：やっぱり何かが動きだす時っていうのは、その中心になる人が、核があるとやっぱり動き出しやすいということですよね。そういったことを考えた時に埼玉会館では何かそういった核作りみたいなことは考えられるんですか。例えば、旧埼玉会館は、渋沢栄一が当初はお金を出して造ったということがありました。まあ、そういうことからの継続であるとか、何かそういった軸になるものができてくるといいなって気がするんですけれども。

山海：この建物はさっき言ったように56年経っていて、あと4年で60年ですね。最初の建物がさっきご紹介しましたけど1926年です。そこから数えるとまもなく100年なんですね。なので、埼玉会館としては100周年というひとつの区切りが来ますので、その時に向けて、初代の埼玉会館についての記憶あるいは記録などそういうものもできるだけうまく収集して、皆さんに見ていただけるような機会を作りたいなということで、今からいろいろ考えているところなんですけど、その時にぜひまた皆さんにも協力をしていただきたいなと思っております。

青山：その話に付け加えると、岡田信一郎の建てたホールを前川國男がやり変えたんですけれども、東京都美術館も岡田信一郎が造った建物を前川國男が変えているわけですよね。この建築見学ツアーにあの東京都美術館の前川ファンのパワーのある人たちが来てましたけど、それとなんか組むと岡田―前川ラインを東京と埼玉で共有するようなこともできるかなと。ちょっと今閃きました。

松永：そういった人脈と言いますか、人の関係の中に核をつくり、そしてそれにまつわる人たちがそこに集まってきて、それが組織化されてくるっていうのもひとつの方法かなというふうに感

じます。それで、残っていく建築に人が集まり、そこに当然組織ができてくる。そのことで、培われてきた文化をいかに人が継承するかっていうことに繋がってくると思うんですよね。そして青山さんは、まさにここで生まれ育って埼玉会館ともずっと関わりのある人なんですけれども、青山さん自身、自分の精神構造の中にどのように埼玉会館っていうのが存在したのか、その辺のことをちょっと聞けたらいいなと思うんですけれども。

青山：とにかくここの舞台、ここ大ホールだったか小ホールで、ピアノの発表会で弟と連弾をしてるんですね。舞台から客席を見るとこんな凄い空間があって、外から見ても埼玉会館はすごい優しい建物っていうか、半分埋れているような、そして中に入るとこんな大きな空間があるんだっていうのに、小学3、4年生の頃にそのピアノの発表会で驚いた記憶があるんですね。それが建築との本格的な初めての出会いだったと思います。それが今、50年経っても60歳になっても残っていて、まだ僕はそこで同じような僕が生きているっていうのが、そういう蓄積が文化的連続性ということなんじゃないかなっていう気がしてるんです。

「あさひ通り」は浦和に住む人の生活に欠かせない「みち」だった

松永：もちろん、居住空間というのは家屋があって、そして表側に道路があったり、また公園があったり。そしてある時期からそこにみんなが集まる場所っていうのが出てくるわけですよね。昔からあったんだけど、それが都市化するにしたがって、たくさんの人が集まれる場所ができてくる。そしてそこに、新たな文化、精神構造が出てきたんだと思うんですよね。

そういうものが変化していくときには、必ずその上に重なりながら増えて広がっていきます。近代化とともに、人々の精神構造はそのようにして膨らんできた気がします。

町の構造のひとつとして建物があり、建物を繋げるためにそこに道ができ、人々はその道を移動しながら暮らし、生活することで人との関係を作っていきます。そこで道は、家と共に非常に重要なものとなります。

ところで最近、「市民会館うらわ」が閉じ、浦和駅の南西側に大きなビルができてそこに入ることになりました。昔から浦和駅から調神社の方に向かう「あさひ通り」という道があるのですが、ビルができることでそれが潰されてしまうことがわかりました。これをきっかけとして、何か具体的に考えられることはないかと思っていました。

若林：実は今朝、たまたまある人のフェイスブックを見てたら、その「あさひ通り」のことが載ってたんです。その前に松永さんから聞いていたので、「あっ、あさひ通りってそういう意味があるのかな？」と思ったのです。（地図を参照）ちょうど一番下のところ、南に調神社があります。斜めのこの道が通ってるっていうのは、その人の説なんです。だからそれが本当かどうかっていうのは、私にはわかりません。ご存じの方がいたら教えてください。浦和宿の街を作ってきたひとつの通り、人たちが駅に急いだり、あるいは信仰で調神社に行く通りがずっとできてきたのだなっていう感想を持ちました。

青山：ちょっと付け足しますと、浦和の中山道そのものが何でこの場所にあるかっていうと、やっぱり調神社と玉蔵院をつなぐラインに古い道があったと。中世ですね。中山道が制定される前にふたつの宗教的な核があって、それを繋いでたのが中山道の前身だったと言われているんですけど、今これを見てふっと思ったのが、ヨーカドーの東にお不動さんがありますよね。この辺で除夜の鐘っていうとあそこから聞こえてくるんですけど。そうすると、お不動さんと調神社をつないでたのが、これなんじゃないかって今思ったんですよね。だからやっぱり近世の街道の整備が始まる前に、中世の時代にそういう宗教的な核を繋いでいた自然発生的な道があって、実は浦和の町っていうのはそれが元々の原型になっていて、その繋ぎやすい調神社と玉蔵院のラインに、家が多かったので中山道が整備されたのかなあって、ちょっと思いまして。そのまま結局、大宮の氷川神社の氷川参道も中山道で、大宮の氷川神社のところで左に折れて、あの旧中山道はあったけど、近世のはじめに都市計画をして、大宮が碁盤の目のまちづくりをして、中山道が駅側にずれてきたと。街道沿いっていうのはやっぱり胡散臭いもんができたりするんですよね。それを大宮氷川神社の前に並べるのはけしからんということで、薄汚いっていうのか、聖と俗は必ず人間の世界にはあるから、それをずらしたのが中山道だっていうのは本で読んだことがあります。だから、そういうことが街の基盤にあったのが、今この浦和でもわかりました。

松永：ありがとうございます。例えば、熊谷の八木橋なんかだと、中山道がそのままあの八木橋の中に残ってるんですよね。あれってどうして残したんですか？

青山：中山道をまたいで八木橋というでかい百貨店ができた時に、１階の売り場の面積のところに昔の中山道に沿った店の内部のインテリアの配置をしたんですね。それで、今もそこが昔の中山道だってことがわかるように、ちゃんと出口のところに中山道っていう石碑が置いてあるんですよ。もしもここが新しい再開発でこの道がそのままでなくなったとしても、何かそれに代わる痕跡のようなものが残せれば、ずっとこの道を使って通勤してた我々とか南半分の人たちの心の中をそんなに荒らさずに済むのではないかなって思ってるんですけど。

松永：浦和ですとね、さくら草通りもあのコルソの建物の中にちゃんと残ったわけですよね。
図面ができてはいるけれども、まだ仮の段階なので、何かしらそこに、１階のフロアだけでも我々のこうした動きが反映されたら浦和も面白くなってくるんじゃないかなという気がしております。皆様方ももちろん、もし興味あれば、そういったことにもいろいろ意見をいただけたらありがたいです。
　長々とお付き合いいただきまして、本日は誠にありがとうございました。「美術と街巡り・浦和」は来週末まで続きます。他にも色々展示をやっていますので、ご覧いただけたら大変ありがたいです。また、埼玉会館の方にもぜひ興味を持ちながら、いろんな形で関わっていただけたらありがたいと思います。それでは本日はこれで終了させていただきます。ありがとうございました。